

トロント大学附属学校

大 谷 尚*

2003年の春、トロント大学へ出張した折りに、トロント大学附属学校を初めて訪問しました。トロント大学には現在二つの附属があります。Institute of Child Study (ICS) と、University of Toronto Schools (UTS) で、前者は日本の小学1年から6年まで、後者は中学1年から高校3年までです。ICSは、大きめの住宅であった建物を使っており、Knowledge Forum という名の、ネットワークを用いた協調学習システムを採用して、子ども達が教科書などにとらわれない自由な学習を進めている実験校です。しかしここでは、生徒の学年が我が附属とまったく同じUTSについて書きます。

UTSは、卒業生の中からノーベル賞受賞者を2人も輩出しているカナダの名門校です。欧米の大学は、大学ごとにラテン語のモットーを有しているのが普通だと思いますが、トロント大学のモットーは、Velut Arbor Aevoで、「時を経て木が生長するごとく」です。そしてUTSのモットーは、Velut Arbor Ita Ramusで、「木が生長するように、まさに枝も」です。この二つのモットーには、大学と附属の関係がきわめて象徴的に表現されていて、すばらしいと思います。名古屋大学教育学部附属学校も、まもなく名古屋大学附属学校に転換する計画です。この計画により、中高大の連携がいっそう強化されるでしょう。そうなる前にでも、トロント大附属を見習って、現在の、Nagoya University Affiliated Upper and Lower Secondary Schoolsという英文表記を、Nagoya University Schoolsとしてしまえばすっきりし、しかもインパクトがあって良いのに、と思うのは私だけでしょうか。

ところで、トロント大附属の様子を少し知ったことで、大学附属が抱える問題は、名大附属と共通していることを痛感しました。しかも、その問題はカナダやアメリカなどの多くの附属全体に共通するものではないかとも考えました。それについて少し書かせて頂きます。

*

アメリカに、「全米附属学校連盟 National Association of Lab Schools」という組織がありますが、その団体のWEBページに、面白い論文があります。それは、ハワイ大学で附属学校に17年間関わってきた Arthur R. King, Jr.という人の書いた「附属学校に突きつけられた課題—ニッチ(すきま)を見いだすこと—」という論文です。この論文は、「附属は『ニッチ』で生きるのだから、附属を取り巻く環境が変われば、新しいニッチを探さなければならない。つまり『リ・ニッチ』が必要である。そのために、自分たちは、附属での仕事、その結果、教師の任用、教師資格、組織構造、教育学部との関係、他の学部との関係、そして附属学校の目的、機能、特性のその他の

* 教育発達科学研究科教授・中等教育研究センター紀要第3号編集長

側面について、さまざまに変革してきたのだ。」と述べています。そして、「自分たちにとってのニッチと、その、より大きなマクロ環境について研究することは、附属学校にとって恒久的な課題である。」と述べています。これは今日、名大附属が直面している問題に他ならないと言えるのではないのでしょうか。しかも驚くべきことに、この論文は、全米附属学校連盟の大会に、なんと1984年に提出されたものです。そしてKing氏は、ハワイ大附属に17年間関わる間に、名大附属が現在直面しているこの問題に関して、1984年の時点までに大きな「リ・ニッチ」を2回行い、小さな改革を毎年行ってきたというのです。

*

このような動きは、UTSでもまさに始まっています。この学校は、1910年の創立当時は、教室は通常の倍の大きさがあり、教室後方にたくさんの椅子を置いて、公立学校教師たちに授業を見学させていた完全なモデル校でした。しかし、そのような伝統的な教授方法は、現在では多くの公立学校で用いられておらず、もはやこの学校は、公立学校のモデル校として機能しなくなっているのです。またUTSではこれまで、伝統校としての誇りを有する教師達が、伝統的な教授方法で、それぞれ格調高い教育内容を教授してきた歴史があります（UTSは全州から優秀な教師を招き、彼らの多くが、その後大学の教員として転出した時代があると聞きましたが、我が附属も同様な歴史を有しています）。しかしそれでは、個々の教師の教育内容が有機的に連携して学校全体として生徒に獲得させるまとまった学力になるという保証がないわけですし、そもそも学校として、生徒にどのような能力を付けてやろうとしているのかが不明確です。そこで、このような問題状況を克服すべく、学校全体のカリキュラム・コーディネータとして実績を上げた教師を公立学校から招き、その教師を中心として、全学年、全教科、つまりすべての教師の教育内容を点検し、再構成する作業を進めているのです。

さらに、卓越した理科教師を公募によって一定期間採用するEureka Fellowshipというプロジェクトをはじめています。これは、新しい理科授業を創造するための人的、予算的、環境的支援を行うものです。このFellowshipで採用された女性教師の授業を観察し、彼女が開発したプロダクトである教材やCD-ROMをもらいましたが、この教師のはつらつとした様子と、その活気に溢れた授業の様子は大変印象的でした。

以上のように現在のUTSにはまさに、「優秀な生徒を育てる」という「卓越性」の伝統と、「実験学校として研究を進め公立学校のモデルになる」という「機能性」の要求という、矛盾したふたつの目標があります。しかしその2つの目標に、学校や教師が引き裂かれることなくサバイブし、発展していくことこそ、UTSの課題であるということが、学校全体で深く自覚されているのです。世界で教育改革論議が高まっている今、世界の附属学校が抱えているであろうこれらの諸問題を交流しあうことが求められています。そうした交流は、まさに我が中等教育研究センターがなすべき課題であるはずです。トロント大附属だけでなく諸外国の大学附属との交流をはじめ、前述の全米附属学校連盟との情報交流など、今後目指していくべきことはいくらかでも考えられます。我が中等教育研究センターの、そうした国際的舞台上での活動もぜひ期待したいと考えます。

*

さて、中等教育研究センター紀要第3号をお届けします。本号は初めて、〔1〕〔2〕の2分冊で

構成される大部な紀要となりました。それは第一に、本号が3つの特集を掲載したためです。

それらの特集とは、まず、本教育発達科学研究科と中等教育研究センターが、2002年6月19～20日に開催した国際教育フォーラム「中等教育改革の国際比較」の報告です。これは、日本の中等教育のありかたを、世界各国の中等教育の現状とその将来への展望との関わりで検討することを目的に、環太平洋6ヶ国（韓国・中国・タイ・カナダ・アメリカ・日本）から、中等教育に関する中心的な研究者を招いて開かれたものです。これは〔1〕に掲載しています。

次に、2002年8月2～4日に行われた「高大接続のためのワークショップ サマー・スクール2002」の報告です。これは、高校における学びと大学における学びを繋ぐ高大接続のあり方を明らかにするために、愛知県内の高校に広く呼びかけ、高校生44名の参加を得て行われた、初めての試みです。これは〔2〕に掲載しています。

最後に、2002年11月9日に本研究科と本センターによって開催された「全学シンポジウム『大学の知と高校生の学力』」の報告です。これは、名誉教授を含む本学の各研究科と附属学校の代表による討論と懇談会により構成されたもので、そのうち各提案者と指定討論者の提案を記録したもので、〔2〕に掲載しました。

いうまでもないことですが、以上の特集で報告されているのは、いずれも本研究科と本センターが、新たな時代の中等教育のあり方や、中等教育と大学教育との新しい連携のあり方を、さまざまな手がかりをもとに解明しようとする、大変意欲的な研究の試みばかりです。またそれは、本学の附属中・高等学校の今後のあり方を考えていく際に欠くことのできない、基礎的で重要な知見を提供するものでもあります。

これらの特集の他に、〔1〕〔2〕ともに、多数の個別論文を掲載しています。それらの個別論文は、大学研究科と附属学校との共同研究や、附属学校をフィールドとした実践研究です。これらもまた、今後の中等教育のあり方を、教育現場に視点を置いて考えるための貴重な研究報告であるといえます。

このように、本号は大変充実した構成となりました。三つの特集の原稿を執筆して下さった方々、それをおまとめ下さった方々、個別論文を投稿して下さった方々に、この場を借りて深くお礼申し上げます。また、これを手になさった皆様が、本研究科、本センター、本附属学校の上記のような問題意識や課題意識と、それにもとづいて研究に取り組む熱い意欲をお感じになり、この紀要をお役立て下されば、これに勝る喜びはありません。